



●書籍のご購入や内容等については最寄りの書店や発行元にお問い合わせ下さい



『農協が日本人の“食と命”を守り続ける！』

久保田治己 著
 ビジネス社 刊
 定価 1,980円 (本体 1,800円+税)

元JA全農常務理事の著者が、食料安全保障と持続可能な社会の構築に力を尽くす農協の実例と農協に解体的改革を求める諸外国や日本政府の思惑を、俯瞰的な視点で考察した。

JAたじまによる米生産プロジェクト「コウノトリ育むお米」は、地域と手を携えて自然環境の再生と無農薬栽培を成功させたという地域社会に資する好事例だ。JAグループの医療組織である厚生連の救命活動を取り上げた章では、新型コロナウイルス感染拡大時に国内初の集団感染場所となった客船ダイヤモンド・プリンセス号や医療体制がひっ迫した東京・大阪に大勢の医療スタッフを派遣した全国の厚生連病院の活躍を詳説した。農協の持つ有事対応システムの明示は、日本の危機管理体制が不十分であることの証左でもある。

50年前に沖縄で起こった米政府による琉球農業協同組合連合会（農連）への圧力「キャラウェイ旋風」

の淵源を探る章では、当時の米国高等弁務官による信用・経済事業への弾効が農連にまで及んだのは、この機に乗じた日本の民間財界人や官僚らによる農連つぶしであったからとの有力な推論を導出する。続いて現在の日本政府による全農株式会社化という謀略の裏にちらつく米国の影も示唆している。

農協の存在を疑問視する記事や意見を雑誌やSNSでよく見かける。農協の現状は厳しい。ウクライナ情勢や長引く円安の影響で高止まりする生産資材価格に組合員は疲弊している。超低金利政策の煽りを受けたJA金融事業の減益も地域住民に懸念を抱かせた。しかし、小規模農家の利益や地域住民の命を守る相互扶助システムは何が起ころうとも手放してはいけない。共助の重要性と農協の真価を伝える本書をぜひ読んでもらいたい。貧困に逆戻りし、生活苦が増え、資本主義社会の原則のもとに国際市場競争のためであれば人命の尊重すら忘れかねない今のこの国で、本書は拠り所となる光を放っているから。（日本農業新聞 齋藤 花）